行商人の裏稼業

――十六世紀イングランド社会における浮浪者のイメージ

中野春夫

本論の対象は十六世紀イングランド社会において浮浪者（vagabond, rogue）と呼ばれた集団、すなわち同時代の浮浪取締法によって潜在的な犯罪者、あるいは犯罪予備軍とみなされた人々である。十六世紀イングランドの浮浪者とは労働可能でありながら雇用関係に入らない「健常な物乞い（sturdy beggar）」であり、一五五一年の議会制定法は住所不定とみなしうる職業を浮浪者と認定した。その後間もない一五六〇年代に、ジャーナリズムと娯楽産業でも浮浪者の登場人物が特定の職業と関連づけられてパンフレットや詩作品、演劇作品に登場するようになる。本論は議会制定法と歴史書、文学作品の影響関係のなかで特異な浮浪者のイメージが生みだされる過程を分析したい。

一．「行商人のフランス語」

十六世紀イングランドの道徳劇やインタールード、エリザベス朝演劇にはフーテンの寅さんによく似た職業人、行商人（pedlar、現代のアメリカ英語ではpeddler）が登場する。寅さんのトレードマークが帽子に腹巻、スーツケースであるならば、イングランドの行商人のそれはぼろぼろの衣服と巨大なリュックサック（pack）である。ジョ

ン・ヘイウッド作と推定されている『四人のP（*Four Ps*）』に登場する「行商人」はファッション関連のグッズをリュックサックいっぱいに詰め、以下のような口上を語りながら地方を回っていた。

Pedlar　Gloves, pins, combs, glasses unspotted
Pomades, hooks, and laces knotted;
Brooches, rings and all manner of beads;
Needles, threads, thimble, shears, and all such knacks,…[1]

今日ならば「手袋、ピン、櫛に透明ガラス」の類は年代物の稀少品でないかぎり商売になりそうもない。ところが経済史学者であるジョオン・サースクの指摘によれば、これらの商品こそ産業革命以前における近代資本主義の消費社会を生みだしたテクノロジーの最新成果であった。[2] 紡績関連の技術革新が精巧な高品質の物づくりを可能とし、ファッション製品を中心として付加価値の高い装飾品を生みだしていたのである。

『四人のP』は宗教改革期の一五三〇年代に執筆されたと推定されている作品であり、テクストが現存するかぎりにおいて行商人が職業名そのままの登場人物として現れるイングランド演劇史上最初の作品である。[3]『四人のP』が最先端の流行商品を巧みな口上で売りさばく行商人の華やかな一面を示しているとすれば、ほぼ同じ時期に出版された『フランス語教本』（一五三〇年）に使われた例文は一般人が行商人に抱いていた負のイメージを表している。著者ジョン・ポールグレイヴは「彼らは自分たちしか分からない言葉をしゃべっている」という例文を英語とフランス語で挙げ、フランス語文の ‘Ils iargonnet entre eulx’ に対応する英語文を ‘They speke a pedlars french amongest

them selfe' とした。[4]

仲間にしか通じない会話をするのであれば行商人たちにいかがわしいイメージが付きまとうのは当然のことであり、ポールグレイヴが挙げるもう一つの例文は行商人がイメージのうえでジプシーや贋金作りとそう変わりがなかったことを示している—'I speke a pedlars frenche or a gyberishe or any countrefait langaige'. フランス語教本の著者としてポールグレイヴはユーモアから例文に「行商人のフランス語」という表現を選んだのかもしれないが、上記の例文が存在することは少なくとも一五三〇年の時点で、独特な符牒が行商人の間で発達していたことを物語っている。

行商人への偏見はすでに十六世紀初めから存在していたらしいが、この職業への社会差別が法的な次元で公にされるのが一五五一年である。この年にライセンスをもたない地方巡業を違法とする法律がイングランド議会を通過し(5 & 6 Edw. VI. c. 20)、その冒頭で行商人と鋳掛屋が名指しで「この王国にとって必要というよりは有害」と断罪されていた—'Forasmuche as it is evident that Tynkers Pedlers and suche like vagrant psones are more hurtfull than necessarie to the Comen Wealth of this Realme, Be it therefore ordeyned...'[5] 行商人と鋳掛け屋はドサ周りをおこなうことで共通しており、この特性によって両者は十六世紀半ば以降浮浪者の代名詞的な職業とみなされるようになる。

この法律が制定される四年前の一五四七年に浮浪者の定義は以前の浮浪取締法よりはるかに具体化され(1 Edw. VI. c. 3)、「働くことなく幹道の近くや町や村の通りを放浪する」者たちが浮浪者と認定された。右記の一五五一年の法律は無職で住所不定の「放浪する者たち」を地方巡業者にまで拡大したものであるが、正確に言えばライセンスなしに地方巡業をおこなった場合に浮浪者とみなされたのであって、行商人イコール浮浪者ではない。にもかかわらず、十六世紀半ばからイングランド社会では行商人や鋳掛屋であれば浮浪者を連想するのが当たり前になる。ウィリ

アム・シェイクスピアの『ヘンリー六世・第二部』（一五九〇年頃）における一場面はこの偏見が社会に深く根づいていたことを示している。

この劇の第四幕は一四五〇年のケント州で起こった反乱を笑劇的に劇化したものであり、反乱の場面は首謀者のジャック・ケイドが民衆を暴動へと扇動するところから始まる。ケイドはイングランド王リチャード二世の推定相続人であったエドマンド・モーティマーの息子だと称し、自分の妻も名門レイシー家の出自だと主張する一方、肉屋のディックと織物職人のスミスは以下のように傍白で彼の妻の裏稼業を観客に伝える。

Cade　My wife descended of the Lacys—
Dick　She was indeed a pedlar's daughter, and sold many laces.
Smith　But now of late, not able to travel with her furred pack, she washes bucks here at home.
(*The Second Part of Henry the Sixth*, 4. 2. 32–35)[6]

ディックとスミスによればケイドの妻は行商人の娘であり、彼女自身も行商をおこなっている。彼女はドサ周りをしながらレース（Lacy との掛詞）などファッショングッズを売りつつ、副業で売春業も営んでいる（furred pack は行商人のリュックサックと女性器の掛詞）。ところが彼女は一五五一年の法律によって地方巡業ができなくなり、現在は生まれ故郷に戻って「雄鹿（bucks）」を洗う洗濯女（laundress は売春婦、愛人の隠語）を営んでいるらしい。[7] この笑劇的なやりとりは一五九〇年の時点でシェイクスピア劇の観客が「行商人」という語を聞けば即座に浮浪者を連想し、「行商人の娘」もしくは「妻」であれば 'doxy' と呼ばれた裏社会の風俗業従事者を想像したことを物語って

いる。

劇中においてケイドは「仕立て屋（clothier）」と言及されてはいるが、同時代の観客にとってこの登場人物も浮浪者以外の何者でもない。スミスとディックは以下のとおり浮浪取締法で頻出する用語を使ってケイドの法的立場を明らかにするからである。

Cade　Valiant I am—
Smith　A must needs, for beggary is valiant.
Cade　I am able to endure much—
Dick　No question of that: for I have seen him whipped three market days together.
（*The Second Part of Henry the Sixth*, 4. 2. 39–43）

浮浪者を表す語はvagabond（議会制定法では一五七二年以降rogueも使われる）が一般的であるが、法律のなかではさまざまな言い換えがおこなわれており、valiant beggar（健常の物乞い）もその一つである。ケイドはvaliantを「勇敢な」の意味で使っているが、スミスは浮浪取締法で使われる「五体満足な」の意味で混ぜ返す。またケイドが「俺は忍耐強い（endure much）」と語れば、ディックはendureを「皮革の持ちがいい」の意味で使いケイドが三日間受けていた浮浪者にたいする鞭打ち刑に言及する。どちらの言葉遊びでも、観客に浮浪者関連の知識があって初めてスミスとディックの裏解説が理解できる仕組みになっている。

十六世紀のイングランド社会は江戸時代の士農工商制度に似た四区分の階層制度をとっており、民衆や大衆に対応

する賃金労働者（職人）および農業労働者（小作人）は「第四の階層」に属していた。[8] 今日の私たちにとって、シェイクスピア劇に登場する民衆は仕立屋だろうが鋳掛屋だろうが社会的地位の違いはほとんど感じられない。ところが同時代のイングランド社会の住人たちは目に見えない差別的な一線を、社会の最底辺のどこかにくっきりと引いていた。浮浪者に該当しないシェイクスピア時代の観客にとって『リチャード三世』の「市民一」は自分たちの世界の住人である一方、『ヘンリー六世・第二部』に登場するケイドやディック、スミスは同じ「第四の階層」に属する人間でありながら、自分たちとは一線を画しうる異分子でもある。ジャック・ケイドは社会関係の枠組みにおいてグレーゾーンに位置付けられた浮浪者の特異なイメージから生みだされていたのであり、『冬物語』のオートリカス、『じゃじゃ馬馴らし』のクリストファー・スライなど、とりわけよく知られるシェイクスピア劇の大衆スターたちにも同じことがあてはまる。

二．「われら浮浪者の友愛団」

OED における pedlar's French の定義は「浮浪者や窃盗犯（vagabonds and thieves）が仲間内で使う言語、浮浪者や窃盗犯たちの符牒、理解できない言葉」であり（*OED*, pedlar 4b）、その初例に挙げているのが先ほどのポールグレイヴによる一五三〇年の言及である。これも正確を期しておきたいが、ポールグレイヴの例文は pedlar's French という用語の初例であっても、*OED* の定義がこの例文にあてはまるわけではない。一五三〇年の時点で「浮浪者」とみなされるのは健常でありながら物乞いをする人間であり、行商人が浮浪者とみなされるのは一五五一年以降だからである。

ポールグレイヴは「行商人のフランス語」という用語を紹介するだけであったのにたいし、その符牒がじっさいどのようなものかをが明らかにしたのが一五三五年のロバート・コップランドによる諷刺詩『慈善院に通じる街道(*The Highway to the Spital-house*)』である。以下の引用は一五三五年の時点で奇妙な言葉遣いが行商人の専売特許とみなされていたことを示している。

Copland　Come none of these pedlars this way also,
With pack on back, with their bousy speech,
Jagged and ragged, with broken hose and breech?

Porter　Enow, enow. *With bousy cove maund nase,*
Tour the patrico in the darkman case,
Docked the dell for a copper make:
His watch shall feng a prounce's nab-cheat.
Cyarum, by Solomon, and thou shalt peck my jere
In thy gan; for my watch it is nace gear;
Or the bene bouse my watch hath a wyne.
And thus they babble, till their thrift is thin,
I wot not what, with their babbling French,
But out of the spital they have a party stench.(9)

この諷刺詩は著者コップランドと聖バーソロミュー慈善院の門番との対話形式をとっており、右記の引用において四行目から一〇行目まで門番が語るイタリック体の七行が「行商人のフランス語」である（この引用では門番によって「泡を吹くようなフランス語（their babbling French）」と形容されている）。この七行は代名詞や前置詞など単語が部分的に英語であるが、全体的にまったく意味不明であり、同時代の読者でさえ理解不能であったはずである。ところがこの諷刺詩からおよそ三〇年後の一五六六年に浮浪者にかんする実録風の解説パンフレットが出版されると、この摩訶不思議な言語もおよそ半分は理解可能になる。

一五六六年にケント州の元治安判事と称するトマス・ハーマンは彼が職業柄知りえた知識をもとに浮浪者たちの裏組織とその犯罪手口を暴露するパンフレット、『浮浪者と呼ばれるものへの警告（*Caveat or Warning for Common Cursitors*）』を出版した。この書は同時代の一般読者にたいし浮浪者の階層組織とその専門用語、名称を懇切丁寧に解説している点、今日におけるマフィアや反社会的勢力の解説書とよく似ている。ハーマンによれば「このおぞましい位階組織の第一位（first in degree of this odious order）」は組長に相当する‘Ruffler’であり、さらに若頭に相当する「第二位」が‘Upright-man’と呼ばれていた。

ハーマンは浮浪者組織の男性構成員を一五種類、女性を九種類に区分し、合計二十四種類の階級（役割）の一つに「行商人（pedlar）」の名称を与えている。行商人が構成員の名称にされる理由はハーマン自身の説明によると彼等が「邪悪な」犯罪者であるからではなく、議会制定法が無許可の地方巡業を違法と認定していたからであった。

These swadders and pedlars be not all evil, but of an indifferent behaviour...But forasmuch as they seek

gain unlawfully against the laws and statutes of this noble realm, they are well worthy to be registered among the number of vagabonds.[10]

「高貴なイングランド王国のコモンローおよび議会制定法」とは明らかに一五四七年と一五五一年の浮浪取締り関連の議会制定法を指しており、行商人が十六世紀後半期に犯罪集団の一員とみなされる背景がここにある。さらにハーマンは巻末でこの犯罪者集団の「卑しい、とんでもない言語（the lewd, lousy language）」を紹介し、その語彙百十一語を解説している。それは「これら大胆不敵で獣同然の淫乱な乞食とむなしい浮浪者以外には理解できない、半ば英語が混じりあった言葉」であり、ハーマンによれば浮浪者たちの間で「行商人のフランス語」と呼ばれていたのがこの符牒である。[11]

この語彙解説を利用すると一五三五年の『慈善院に通じる街道』に収録されている「行商人のフランス語」の多くが理解できるので、ハーマンが浮浪者の隠語とする「行商人のフランス語」はもともと行商人が用いていた職業上の符牒であることは疑いない。もしかすれば一五六六年の時点でもこの隠語を使うのは行商人に限られていたかもしれないが、「行商人のフランス語」は行商人が一五五一年の議会制定法で浮浪者と認定されることにより*OED*の定義どおりに「浮浪者と窃盗犯の符牒」と変わったのである。

序文に相当するハードウィックのベスへの献辞において、ハーマンは「浮浪者たちの取調べから分かるかぎり、彼らの言葉（浮浪者たちは行商人のフランス語、すなわち隠語と呼んでいた）が生まれたのはここ三〇年以内のことであり、まずそれ以前ではない（began but within these thirty years, little above）」と述べている。[12] もちろんこの数字も正しくなく、ポールグレイヴの一五三〇年の言及に従えばハーマンのパンフレットが出版される三十六年前の

時点ですでに「行商人のフランス語」なるものが存在することは世間でかなり知られていた。問題はハーマンが「三〇年以内」と推測する根拠であるが、右記の引用では浮浪者への尋問の成果とされている。ハーマン自身の証言によると彼が小遣いや食事と引き換えに情報を得たとする浮浪者はすべて「十三歳から十六歳、あるいは二〇歳とちょっと」の若い男性であり、理屈のうえで彼らの口から三〇年前の情報を得ることは考えにくい。むしろ「行商人のフランス語」という用語および実際の例と関連して「三〇年」という数字が出てくるとすれば、その情報源としてありうるのは若い十代の浮浪者たちではなく一五三五年に出版されたコップランドの『慈善院に通じる街道』なのである。

さらにいえばギルドのような浮浪者たちの一大組織とその構成員にかんするハーマンの報告は今日でいえば剽窃に該当するもので、その情報の多くが五年前に出版されたジョン・オードリーの『浮浪者の友愛団（*Fraternity of Vagabonds*）』（一五六一年）から得られている。'Upright-man' から 'Wild Rogue' と 'Doxy' に至るまで浮浪者友愛団の構成員の名称とその役割の記述はほとんどがこのオードリーからそのまま転用されたものであり、階層区分の数でさえその霊感は明らかにオードリーの著作物から得られている。数を一つ減らしてはいるものの、ハーマンが挙げる浮浪者の二十四階級はオードリーが『浮浪者の友愛団』の巻末に収録している『コック・ローレルによって承認された悪党の二十五階級（*The XXV. Orders of Knaues, otherwise called a quaterne of Knaues, confiermed for euer by Cocke Lorell*）』を踏襲していることは疑いない。

A・V・ジャッジズ（一九三〇年）とガーミニ・サルガードー（一九八四年）の著書は「エリザベス朝の裏社会」という用語を今日でもよく知られるものにし、一九九〇年に編集された「浮浪者文学」集の序文も「裏社会」の存在を当然のこととして記述している。ところが社会史学者A・L・バイアーの指摘によれば、ハーマンによって描かれるような浮浪者集団が存在したことを裏付ける資料や統計は存在せず、十六世紀のイングランド社会に「裏社会」の

表現に値するような犯罪組織が存在していた形跡すらない。[13] また行商人などある特定の職業に浮浪者が集中していたわけではなく、まして強い犯罪的傾向が見られたわけでもない。バイアーの指摘どおり「裏社会」の闇組織が実在しなかったのであれば十六世紀のイングランド社会は現実世界の浮浪者とは異なる架空の「浮浪者」像を作りあげていたことになる。話が複雑になるのはこの「浮浪者」像が同時代の人々に広く信じられていたことであり、十六世紀を代表する歴史編纂家ウィリアム・ハリソンでさえその例外ではなく、むしろ「裏社会」神話を広めた張本人と呼べるのがこの歴史家である。

アナベル・パターソンの表現によれば、一五七七年に出版された『ホリンシェッド年代記』は当時を代表する十名の歴史編纂家によって編集され、「今日ならばイギリス『文化』史と表現できる壮大かつ画期的」な事業であった。[14] この年代記の巻頭に収録され、いわば年代記全体の概論になっているのがウィリアム・ハリソンの『ブリテン島の歴史的描写（*A Historical Description of the Island of Britain*）』である。この文献は今日『イングランドの描写（*Description of England*）』のタイトルで知られているが、それは『ホリンシェッド年代記』が一五八七年に改訂されたさいハリソンがタイトルを後者に変更したからである。

ハリソンは『ブリテン島の歴史的描写』の第十章「貧困者に与えられる給付について（Of Provision Made for the Poor）」において、イングランド社会の貧困者を先天的障害者、労災者、浮浪者の三種類に区分し、前者二つは救済対象である一方、最後の浮浪者は処罰対象であると指摘している。ハリソンによればイングランドで浮浪者が出現したのは最近であり、ここ六〇年間に起こった現象とされる。[15] ハリソンはその数が「現在一万人を超えている」と述べ、つづけて浮浪者たちの特性であるお決まりの「行商人のフランス語（pedlar's French）」を紹介する。以下のハリソンによる解説は彼が浮浪者関連の情報をどこから得ていたかを明快に物語っている。

they [English rogues/vagabonds] have devised a language among themselves which they name 'canting' but other, 'peddler's French', a speech compact thirty years since of English and a great number of odd words of their own devising...[16]

ハリソンは浮浪者たちが「行商人のフランス語」を考案したのは「三〇年前（thirty years since）」であると指摘しているが、この数字も正しくない。『ホリンシェッド年代記』の初版が出版されたのは一五七七年であるから、上記の「三〇年前」は一五四七年になる。すでに触れているが、ポールグレイヴによる一五三〇年の言及はすでにこの時点で行商人の独特な符牒が広く世間に知られていたことを示している。

アナベル・パターソンの指摘によれば『ホリンシェッド年代記』が改定されたさい、ハリソンは『ブリテン島の歴史的描写』にたいしてかなり細かい訂正を施していた。[17] ところがハリソンは第二版の『イングランドの描写』でも「三〇年前」という記述を変えていない。ハリソンはそれ自体正しくないハーマンの『浮浪者と呼ばれるものへの警告』の情報をそのまま受け入れ、ハーマンの一五六六年の時点における「三〇年前」という記述を、一五七七年版でも一五八七年版でもそのまま転用していたのである。このことが示すのはハリソンが浮浪者の実態にかんしてまったくとは言えないにせよ、ハーマン以外にはほとんど参照していないという事実である（参照していれば間違いにすぐ気付く）。だからこそ『ブリテン島の歴史的な描写』（『イングランドの描写』）では、ハーマンの記述そのままに浮浪者たちの一大組織がイングランド社会に実在していることになり、その組織はこれまたハーマンの解説どおり 'Ruffler' と 'Upright-man' を頂点として男性十五区分、女性九区分の階層制度を構成していた。

「行商人のフランス語」を補助線として浮浪者像の生成過程を分析してみると、オードリーの翻案もしくは再録であるハーマンをさらにハリソンが再録化していく過程がくっきりと浮かび上がる。その結果、エリザベス朝の文学作品に行商人という設定の登場人物が現れる場合、この登場人物は現実世界における行商人のイメージだけでなく、オードリーとハーマンが創作した裏社会神話における浮浪者のイメージをも担うことになる。その一例がシェイクスピアの『冬物語（*The Winter's Tale*）』に登場する行商人オートリカスにみられる。

オートリカスが登場する一連の場面はまずはその時代の行商人がおおよそどのような商売をしていたのか、現実世界の情報を今日の私たちに教えてくれる。シェイクスピア時代の行商人は富山の薬売りのように訪問販売をするのが通常であったらしく、玄関先で即席の歌謡&ダンスショーを開いていた—'O, master, if you did but hear the pedlar at the door, you would never dance again after a tabor and pipe'（4. 4. 216–17）。歌とダンスでお客を惹きつけてオートリカスは魔法のような口上を繰りだし、リュックサックに入れたファッショングッズを次々に売りさばいていく。

その一方で、この登場人物は行商人にたいする同時代の差別的なイメージも体現している。行商人の登場人物であれば神業クラスの盗みの能力をもっているのが当たり前であり、じっさいオートリカスは被害者にいつどこでどう掏られたのかをまったく気づかせない天才掏り師として描かれる。オートリカスは追剝にあったふりをして、裕福な羊飼いの息子（「道化」）から電光石火の早業で財布を盗みだし、盗みがばれかけても機転を働かせて切り抜ける。

Autolycus　O, good sir. Softly, good sir! I fear, sir my shoulder-blade is out.
Clown　　How now? Canst stand?

Autolycus　Softly, dear sir. Good sir, softly. You ha' done me a charitable office.　[Picks his pocket]
Clown　Dost lack any money? I have a little money for thee.
Autolycus　No, good sweet sir. No, I beseech you, sir. I have a kinsman not past three quarters of a mile hence, unto whom I was going. I shall there have money, or anything I want. Offer me no money. That kills my heart.　(*The Winter's Tale*, 4. 3. 58–64)

現代綴り編集版テクストでは右記の引用のように、三行目から四行目の間に「ポケットから掏り取る」というト書きが補われるが、一六二三年のフォリオ版にはこの種の指示はない。言い換えれば今日ではこのト書きがないと何が起こっているのか理解できない一方、フォリオ版は十六・十七世紀のイングランド人であればト書きなどなくとも「行商人」が何をやらかすのか容易に想像できたことを示している。

十六世紀の半ばから十七世紀の半ばまでの約一世紀、イングランド社会は一部の職業にたいして差別的なイメージを生みだしていた。オートリカスのような行商人（pedlar）はリュックを背負って小間物を売るばかりでなく、きまって「陽気（merry）」で「酔っぱらい（drunken）」、そして凄腕の「窃盗犯（theft）」として描かれていたのである。

三、「酔っぱらいの鋳掛屋」

今日の定義で物乞いは「食べ物や金銭を人から恵んでもらって生活する者、ものもらい」（『広辞苑』、「乞食」二）

であり、beggar も ‘a person who lives by begging for food or money’（*OED*, beggar 1）である。この定義からすると物乞いも beggar も職をもたない、もしくは働けないから「恵んでもらう」のであって、物乞い兼業の就労者は想定しにくい。ところが十六・十七世紀のイングランド社会では職業をもつ物乞い（あるいは物乞いをする職業人）がいても不思議ではなく、その種の物乞いが一六二三年に出版されたシェイクスピア劇のフォリオ版テクストにおいて確認できる。

フォリオ版の『じゃじゃ馬馴らし（*The Taming of the Shrew*）』にはト書きで「物乞い（Beggar）」と指示されている登場人物が現在に至る職歴を以下のように語る。

> Beggar　What, would you make me mad? Am not I Christopher Sly, old Sly's son of Burtonheath, by birth a pedlar, by education a cardmaker, by transmutation a bear-herd, and now by present profession a tinker?
>
> （*The Taming of the Shrew*, Induction 2. 14–16）

この物乞いにはクリストファー・スライという固有名詞があり、今日ではこの登場人物はスライの名でよく知られている。スライによれば彼の父親は行商人（pedlar）であり、スライ自身は金属製造業（cardmaker の card は生羊毛梳きの鉄器）で職業訓練を受けたと語っている。ただしスライは金属製造関係の職人にはならず、いわゆる熊いじめの大道芸人（bear-herd）を経て現在は鋳掛屋（tinker）におさまっている。

『じゃじゃ馬馴らし』は劇中劇構造をとっていることで知られており、外枠の「序幕」にスライというスターが登場する。この登場人物をフォリオ版の「物乞い」から固有名詞の「クリストファー・スライ」へと変えたのがニコラ

ス・ロウの全集版（一七〇九年）である。さらにロウは登場人物一覧でスライの職業を鋳掛屋と明記し、その後の編集版テクストはロウの改訂を踏襲している。そのため今日「物乞い」という設定は『じゃじゃ馬馴らし』のテクストからほとんど消え失せており、かろうじてオクスフォード版とノートン版が部分的に残すフォリオ版のト書き、さらには領主がスライを最初に目にした瞬間に発する表現‘the beggar’（Induction 1. 35）だけがその設定の痕跡をとどめている。一五三六年以降議会制定法では「健常な（sturdy, valiant, strong）」という修飾語が加わることになるが、もともと用語としての「物乞い」は一五三一年の浮浪取締り法のタイトルでは浮浪者とほぼ同義であった（An Acte concernyng punysshement of Beggars & Vacabunde）。「物乞い」スライの職歴は住所だけでなく職業さえもコロコロと変え、最終的には鋳掛屋という収まるべき職業に収まる華麗な浮浪歴を喜劇的に表現したものに他ならない。

ロバート・グリーンの『コニー・キャッチング第二部（*The Second Part of Cony-catching*）』に収録された「ナイトと錠前はずしの鋳掛屋の面白い実話」は、一五九一年の時点で浮浪者の代表ともいえる鋳掛屋にたいする露骨な偏見が広まっていたことを示す。鋳掛屋には金属道具の修繕以外に「錠前はずし（picklock）」という副業（あるいは本業）があり、彼らの道具袋（budget）の奥に泥棒道具が潜んでいるのは当たり前と考えられていたのである。[18] 十六世紀末までに鋳掛屋が胡散臭さの代名詞となる tinker 関連の諺も複数生まれていた。あこぎな商売の代表格が鋳掛屋であり、鋳掛屋は修繕を頼まれた鍋にこっそり二つか三つ穴を開け、その分多く代金を請求する—‘A tinker stops one hole and make two（three）’（Tilley, T347）。ティリーの諺辞典に収録されている tinker 関連の諺の用例はすべて一五五一年以降のものであり、コニーキャッチング・パンフレットを含めた「裏社会」の実録風文学が次々と出版されるのも一五五一年以降である。鋳掛屋にたいする偏見は tinker という単語（tink はトンカンという

音）が生まれたときから存在していただろう。ただし鋳掛屋と行商人にたいする定番的な負のイメージが急速に発展していくのは、両者への偏見が「この王国にとって必要以上に有害」な存在として議会制定法で明文化された一五五一年以降なのである。

一五六一年に出版されたジョン・オードリーの『浮浪者の友愛団』は鋳掛屋といえば陽気な酔っぱらいであり、一日中居酒屋で酒浸りになり、気が向いたときに物乞いに出かけるという鋳掛屋のイメージを生みだし、定式化させた—'A Tinkard: A tinkard leaveth his bag a sweating at the ale-house, which they term their bousing inn, and in the mean season goeth abroad a begging'.[19] さらにその五年後、オードリーの鋳掛屋はトマス・ハーマンの『浮浪者と呼ばれる者への警告』において「酔っぱらいの鋳掛屋」へと進化し、鋳掛屋のイメージは女性を食い物にする極道にほぼ近いものとなった。

Chapter XIII　A Drunken Tinker

These drunken tinkers, called also priggs, be beastly people, and these young knaves be the worst. These never go without their doxies, and if their women have anything about them, as apparel or linen, that is worth the selling, they lay the same to gage, or sell it outright, for bene bouse at their bousing ken.[20] And full soon will they be weary of them, and have a new.

暇と金さえあれば四六時中居酒屋で酒を飲み、愛人（doxies）が換金できそうなものを身につけていれば身ぐるみはいで酒代に換える。女が気に入らなくなればさっさと新しい女に乗り換える。その気になったときハーマンの鋳掛屋

はようやく腰を上げ、鋳掛屋本来の「仕事」（窃盗と過大請求を含む）に励む。『二人の血縁の貴公子（*The Two Noble Kinsmen*）』において牢番の娘が語る猥雑なジョーク（holes は女性器も意味する）は十六世紀後半期に生まれた鋳掛屋の新たなイメージを集約したものである—'I know you, you're a tinker: sirrah tinker, /Stop no more holes but what you should'（3. 5. 92–93）。

シェイクスピアの劇作品には「酔っぱらいの鋳掛屋」とイメージがぴったり重なる登場人物がクリストファー・スライ以外にも存在する。フォールスタッフは手下たちとともに「猪頭亭（Boar's Head）」で夜な夜なドンチャン騒ぎを繰り広げ、さらにはギャッズヒルで追いはぎまでしでかす。またこの無頼漢は以下のように酒代の捻出のため愛人に身の回りのものを質に入れさせようとする。

Hostess Quickly　Prithee, Sir John, let it be but twenty nobles. I loath to pawn my plate in good earnest, la.

Falstaff　Let it alone. I'll make other shift. You'll be a fool still.

Hostess Quickly　Well, you shall have it, although I pawn my gown. I hope you'll come to supper. You'll pay me all together?　（*The Second Part of Henry the Fourth*, 2. 1. 109–13）

ヘンリー五世の放蕩神話を劇化するさい、シェイクスピアは浮浪者の「裏社会」神話を利用して逸脱の放蕩世界を表現したのである。ただしフォールスタッフには見のがせない特異性もあり、ハーマンの言及に従えば浮浪者は若い世代であるのにたいし（'these young knaves'）、「六〇歳とちょっと」という設定のフォールスタッフは「酔っぱらい

の鋳掛屋」の高齢者ヴァージョンだと言える。

『じゃじゃ馬ならし』のクリストファー・スライもシェイクスピア時代の観客にとって鋳掛屋というよりは、現実的な欲望以外に関心がない中高年の浮浪者であったはずである—'Come, madam wife, sit by my side and let the world slip, we shall ne'er be younger'（Induction 2, 132–33）。「喜劇」という単語すらも知らず、たぶんお芝居で結婚喜劇を見たことがないスライが望むのは「安ビール一杯（a cup of small beer）」を飲むか、「マダム奥様」と一刻も早くベッドを共にすることである。劇中劇で演じられるじゃじゃ馬馴らしや逆玉の輿そのものが住所不定の浮浪者たちにとっては夢のまた夢、同じ放浪者でありながら処罰の対象とならないジェントルマン階級の若い独身男性だけが演じられる世界なのである。[21]

行商人のオートリカスと鋳掛屋のスライはエリザベス朝イングランド社会が生みだした浮浪者にたいする特異なイメージから成り立っている。一連の浮浪取締法は浮浪者と認定される法的基準とその処罰法を示すだけで、浮浪者の日常生活まで言及することはない。ところが同時代の人々には、一連の歴史書やパンフレットを通じて浮浪者にたいする固定観念、すなわち職をひんぱんに変え（男性なら）女癖が悪く、悪知恵だけは人一倍発達している反社会的な逸脱者像が刷りこまれていた。オートリカスが喜劇的に語る自分自身の遍歴はまさしくこの逸脱者像と一致している。

Autolycus　I know this man well. He hath been since an ape bearer, then a process-server, a bailiff, then compassed a motion of the prodigal son, and married a tinker's wife within a mile where my land and living lies, and, having flown over many knavish professions, he settled only in rogue. Some call him Autolycus.

Clown　Out upon him! Prig, for my life, prig. He haunts wakes, fairs and bearbaitings.

（*The Winter's Tale*, 4. 3. 71–76）

オートリカスもスライ同様に「猿回し芸人」から「召喚状配達人」、「人形芝居芸人」など「多くの悪党の職業」を転々としながら、愛人を鋳掛屋と共有しつつ、最後は行商人というお決まりの職業に収まる。典型的な浮浪者であるオートリカスを評して「道化」は‘prig’と表現しているが、この単語はオードリーの新語 prigman をもとにしてトマス・ハーマンが造ったものである。ハーマンによる先の引用によると prig は「酔っぱらいの鋳掛屋」の別名であり、オードリーの prigman も「彼らが浮浪者の蔵と呼ぶ生け垣から衣服を失敬し、居酒屋で売り飛ばす」窃盗犯に他ならない。[22]

オートリカスが初めて舞台に登場するとき、彼は小唄を口ずさみながらビールがおいしく感じられる裏事情を観客（読者）にあけすけに語ってくれる。

Autolycus（singing）The white sheets bleaching on the hedge,
With hey, the sweet birds, O, how they sing!
Doth set my puggish tooth an edge,
For a quart of ale is a dish for a king.

（*The Winter's Tale*, 4. 3. 5–8）

生垣（hedge）がオートリカスの仕入れ先の一つであり、彼は生垣に干してある白いシーツを失敬して売り払い「四分の一ガロンのビール（a quart of ale）」の代金を稼ぎだす。オートリカスの商品のうち衣料関係のものは原価がタダであり、だからこそビールがおいしい。シェイクスピア劇における貧困者もしくは無頼漢たちの登場人物像の輪郭はオードリーとハーマンたちがつくりあげた浮浪者のイメージそのものなのである。

エリザベス朝において「浮浪者」をあらわす一般的な単語は rogue と vagabond であり、『イングランド議会制定法集（*Statutes of the Realm*）』の索引でも浮浪者関連の法律は 'Rogues and Vagabonds' で分類されている。ただし一五三一年に最初の浮浪取締法（22 Hen. VIII c.12）が制定された時、浮浪者というカテゴリーは vagabond と beggar で表わされ、rogue が議会制定法の文面に登場するのは一五七二年からである。*OED* によれば rogue の初例は一四八九年であるが、この単語がよく使用されるようになるのはオードリーとハーマンのパンフレットが現れる一五六〇年代以降であり、新たに rogue が一五七二年から法律用語になる背景にはこの事情があると思われる。それから二〇年後、劇作家・パンフレット作者であるトマス・ナッシュが『文無しピアスの嘆願（*Pierce Penniless*）』（一五九二年）において roguery という新語を造り、さらにその数年後、シェイクスピアがこの最新の単語を利用して文学史上名高い悪女の奔放なイメージに新たな一面を加えることになった。

シェイクスピアが新語の roguery を最初に使ったのは『ヘンリー四世・第一部』（推定執筆年代一五九八年）においてであり、フォールスタッフはこの語で「猪頭亭」のあこぎな酒の売り方を表現している—'You rogue, here's lime in this sack too.—There is nothing but roguery to be found in villainous man'（2. 4. 95-96）。粉屋は小麦粉に石灰を混ぜて目方をごまかすが、居酒屋の場合白ワインに石灰を入れて高く売りつけるのが詐欺に該当する。現実の世界では多種多様な詐欺が演じられていたと思われるが、その当時の観客が女性浮浪者の roguery として具体

的に想像できたとすれば、それは「ウサギ狩り（cony-cattching）」という隠語で知られるイカサマや詐欺、窃盗の手口を暴露する一連のパンフレットによる情報であろう。とりわけ有名なのがロバート・グリーンの『男詐欺師と女詐欺師の大論争』（一五九二年）であり、「ウサギ狩り」パンフレットの締めくくりとなる同書では女性浮浪者のフェア・ナンが未婚男性相手にあの手この手で金品を巻き上げていく風俗詐欺が実録風に描かれている。[23]

シェイクスピアの『トロイラスとクレシダ』は浮浪者のイメージを利用して、ボッカッチョやチョーサーなど中世期の大詩人たちが手掛けたトロイラス物語を十六世紀イングランド社会ヴァージョンへと翻案化したものである。心変わりをしないとトロイラスに誓ったにもかかわらず、ギリシャの将軍ダイオミディーズの愛人となったクレシダは中世期のトロイラス物語において「不実な女性」の代名詞であったが、シェイクスピアの演劇版では「不実な女性」が男性の下心をたきつける風俗業従事者にも見えることになる。以下は第五幕第二場においてトロイラスがクレシダの心変わりを目撃する場面である。

Diomedes　How now my charge?
Cressida　Now, my sweet guardian! Hark, a word with you.
Troilus　Yea, so familiar?
Ulysses　She will sing any man at first sight.
Thersites　And any man may sing her, if he can her clef: she's noted.
Diomedes　Will you remember?
Cressida　Remember? Yes.

Diomedes　Nay, but do, then;
　　And let your mind be coupled with your words.
Troilus　what should she remember?
Ulysses　List!
Cressida　Sweet honey Greek, tempt me no more to folly.
Thersites　Roguery!

(*Troilus and Cressida*, 5. 2. 17–19).

この場面ではクレシダが弄する恋の手練手管をトロイラスとユリシーズが目撃し、さらに二人の盗み見をその外側からサーサイティーズがみつめ、「彼女の音符（女性器）を手に入れれば、男は誰でも彼女を歌わせられる」とシェイクスピア時代の観客の感想を代弁する。クレシダはダイオミディーズにたいして「もうこれ以上愚かなことには誘わないで」と語るが、その台詞はサーサイティーズにとって男性の情欲をあおりたてる「浮浪者の手口（roguery）」としか聞こえない。トロイラスとクレシダの伝統的な恋愛悲劇は売春産業を想像させるグロテスクな男女の駆け引きへと変えられたのである。

『十二夜（*Twelfth Night*）』の劇世界にも浮浪者に該当する行動をとるか、もしくはその境遇に陥る登場人物が存在する。海難事故に遭い、住所不定の無収入者になった双子の兄セバスティアンは現在の自分が「浮浪者の境遇（extravagancy）」にあることを明確に自覚している—'my determinate voyage is mere extravagancy'（2. 1. 7）。妹のヴァイオラもオーシーノ公爵に雇用されなければ兄とまったく同じ境遇なのである。さらに道化のフェステでさえ一五六一年の「労働者法」を厳密に適用すれば浮浪者として処罰されうる。オリヴィアとマライアによれば、フェステ

は長期にわたって職場放棄をしており、その間屋敷に全く顔を見せなかったからである—'you will be hanged for being so long absent' (1. 5. 3–4)。また、劇中でフェステはオーシーノ公爵とオリヴィアの屋敷を職務とは無関係に往来し、その都度小遣いを獲得しており、はたして誰が彼を雇用しているのか分からない。

道化フェステと浮浪者との関連性はこれまで指摘されてこなかったように思われるが、無頼派の道化フェステが芝居の締めくくりに歌う小唄は、その用語からして「シェイクスピア劇における浮浪者の一生」と題されても不思議ではないものである

Feste　When that I was and a little tiny boy,
With hey, ho, the wind and the rain,
A foolish thing was but a toy,
For he rain it raineth every day.

But when I came to man's estate,
With hey, ho, etc.
Gainst knaves and thieves men shut their gate,
For the rain, etc.　(*Twelfth Night*, 5. 1. 372–83)

子供の頃には「おイタをしても大目に見られ」、それなりに社会の中で居場所はある。ところが成人になるとジャッ

ク・ケイドのような「悪党と盗人には誰もドアを開けてくれない」。妻帯者になって人生の後半部に差し掛かると、クリストファー・スライのように周囲とのいさかいで気分が晴れることがない。そして晩年になれば『ヘンリー五世』で伝えられるフォールスタッフのように寝たきりとなり、「酔っ払いと同じく年がら年中頭が酔っぱらっている」。

フェステが歌うエピローグ的な小唄は浮浪者の二面的な要素、すなわち娯楽作品やパンフレットではその喜劇性が観客・読者を大いに楽しませる一方、現実世界における処罰対象としての浮浪者たちは一五五一年の法律が明言するように「この王国にとって必要というよりは有害な」厄介者に他ならなかったことを物語っている。十六世紀イングランド社会の浮浪者像は現実世界の議会制定法と歴史書、パンフレット、そして演劇作品との間の不思議な影響関係から生みだされていたのである。

［本論文はＪＳＰＳ科研費・基盤研究Ｃ「エリザベス朝演劇における社会的弱者の表象」（研究代表者・中野春夫・課題番号２３５２０３２０）の助成を受けたものである］

注

（1） John Heywood, *The Four Ps* in *The Dramatic Writings of John Heywood*, John S Farmer, ed. (London: the Early English Drama Society, 1905), D2v.

（2） ジョオン・サースク『消費社会の誕生――近世イギリスの新企業』、三好洋子訳、東京大学出版会、一九八四年、一五八―六〇頁。

（3） 現存するイングランド中世劇の登場人物名は以下の演劇事典によって確認できる―『イギリス中世・チューダー朝演劇事典』、松田隆美編、慶応義塾大学出版会、一九九八年。

（4） John Palsgrave, *Lesclarcissement De La Langue Francoyse* (1530), *English Linguistics 1500–1800* No. 190 (Menston:

Scolar Press, 1969), fol. 358 recto.

（5）　本論における議会制定法の引用は以下による—*Statutes of the Realm*, 12 vols. (rept. of 1819, Buffalo: William S Hein, 1993).

（6）　本論におけるシェイクスピア劇の引用はすべてRSC全集版による—*William Shakespeare Complete Works,* Jonathan Bate and Eric Rasmussen, ed. (Basingstoke: Macmillan, 2007).

（7）　洗濯業あるいは繊維関係の女性従業者が売春婦のイメージと関連付けられた現象については以下を参照せよ—Fiona McNeill, *Poor Women in Shakespeare* (Cambridge: Cambridge University Press, 2007), pp. 9–10.

（8）　十六世紀イングランドの社会階層については以下を参照せよ—Sir Thomas Smith, *De respublica Anglorum* (Cambridge: Cambridge University Press), Part I, xvi–xxiv; William Harrison, *The Description of England*, Georges Edelen ed. (New York: The Folger Shakeseare Library, 1968), Chap. V, pp. 94–123.

（9）　Robert Copland, *The Highway to the Spital-houes* (1535) in *The Elizabethan Underworld*, A. V. Judges, ed. (London: George Routledge & Sons, 1930), p. 24.

（10）　Thomas Harman, *Caveat or Warning for Common Cursitors* (1566) in *The Elizabethan Underworld*, p. 93.

（11）　Thomas Harman, *Caveat or Warning for Common Cursitors*, p. 64.

（12）　Thomas Harman, *Caveat or Warning for Common Cursitors*, p. 62.

（13）　A・L・バイアー『浮浪者たちの世界—シェイクスピア時代の貧民問題』、佐藤清隆訳、同文館出版、一九九七年、二一九—二二四頁。Cf. *Rogues, Vagabonds & Sturdy Beggars: A New Gallery of Tudor and Early Stuart Rogue Literature*, Arthur F Kinney, ed. (Amherst: The University of Massachusetts Press, 1990).

（14）　Annabel Patterson, *Reading Holinshed Chronicles* (Chicago: Chicago University Press, 1994), p. 3.

（15）　William Harrison, *The Description of England*, p. 183.

（16）　William Harrison, *The Description of England*, p. 184.

（17）　Annabel Patterson, *Reading Holinshed Chronicles*, pp. 58–70.

（18）　Robert Greene, *The Second Part of Cony-catching* (1591) in *The Elizabethan Underworld*, pp. 176–78.

(19) John Awdeley, *Fraternity of Vagabonds* (1561) in *The Elizabethan Underworld*, p. 55.

(20) Thomas Harman, *Caveat or Warning for Common Cursitors*, p. 92.

(21) 一五七二年の議会制定法（14 Eliz. c. 5）によると「五体満足であり、かつ不動産もしくは主人を持たない」者が浮浪者と認定され、不動産収入のあるジェントルマンは放浪しても浮浪者とは見なされない。

(22) John Awdeley, *Fraternity of Vagaboods*, p. 53.

(23) Robert Greene, *A Disputation between a Hecony-catcer and a She cony-catcer* (1592) in *The Elizabethan Underworld*, pp. 216–18.